

Yom T'ruah ラッパを吹き鳴らす日

創世記21:1~34 レビ記23:23~25 民数記29:1~6
第一テサロニケ人への手紙4:1~18

はじめに

世界どの国でも固有の暦を持っている。その暦とは、それぞれの国々の文化や風習と深い関係がある。現代の日本の暦は、古代日本のものではない。古代日本の暦は、太陽暦ではなく、太陰太陽暦の天保暦という暦であったのである。この暦は今では旧暦と呼ばれているが、農業や漁業を営む人々の頼りとなっている。ちなみに、旧暦に従って種蒔きや収穫の時期、または、漁に出られる時期を予想するのである。ちなみに、現在の太陽暦は、世界的に共有されている暦である。この暦は、本来エジプトで使われていたものを、ローマの皇帝ジュリアス・シーザによってローマに持ち込まれて使われたものを、16世紀ローマ法王のグレゴリオ13世の勅令によって改善され、使い始めたものである。その以降、このグレゴリアン・カレンダはキリスト教を受け入れる国々の暦となり、西洋の文化を受け入れる日本も、明治時代の1873年1月1日からこの暦を使い始めたのである。そして、本来の旧暦の各々の祭日を太陽暦に置き換えたのである。例えば、お盆というのは、文字通り旧暦の8月15日の満月のときに収穫を祝う祭日を意味するが、ただ日時の8月15日をそのまま太陽暦の日時に置き換えているので、不思議に厚い真夏の満月でもないときに、お盆を祝うこととなっているのである。というわけで、太陽暦であれ旧暦であれ、暦というのは我々の見える世界、また見えない世界のなかで、大きいな影響力を与えているのは事実である。

聖書の世界でも、主なる神によって定められた暦がある。そして、その暦に従って、定められた場所と時に、その方を礼拝するように命じられている²。しかしながら、聖書の暦は何時からあるものなのか。聖書によれば、創世記7~8章のノアの時代には、確かに月の表示がある。これは、もっと前からあることを示しているのである。ところで、レビ記23章の例祭という言葉は、もっと正確なヒントを与えてくれる。ちなみに、レビ記23章に記されている例祭を表わすヘブル語の「מועד」(*moed*)は、創世記1:14に「季節」を表わす言葉として使われている。このような聖書の内容によって私たちは、聖書の暦が主なる神によるものであると理解出来る。というわけで、聖書の暦とは、聖書を信仰の源とする、メシアにある私たちにとって重要な意味を持つのである。

聖書の暦の新年

暦の新年というのは、何となく特別な意味を持つのである。ところで、聖書の暦の新年はいつなのか。出エジプト記の12章によると、主なる神の御命令によって春のアビブの月が正月となる。

この月をあなたたちの正月とし、年の初めの月としなさい。〈出12:2(共)〉

あなたたちはアビブの月のこの日に出発する。〈出13:4(共)〉

さらに、創世記7~8章によると、このアビブの月は第七の月であったことが分かる。つまり、出エジプト記12章までの正月は、第七の月になるわけである。聖書のなかでこの第七の月というのは、エタニムの月と呼ばれている。

エタニムの月、すなわち第七の月の祭りに、すべてのイスラエル人がソロモン王のもとに集まった。〈第一列王8:2(共)〉

しかしながら、イスラエルでは現在エタニムの月というより、ティシュリの月と呼ばれている。このティシュリというのは、聖書に由来するのではなく、タルムドに由来するのである。ちなみに、ティシュリという言葉の語源は確認できないが、バビロン捕囚時代以降に持ち込まれた言葉であると言う。ところが、どうしてイスラエルでは、聖書に記されているエタニムの月という言葉より、ティシュリという言葉が好きなのか。また、聖書に第七の月とされた月を正月と祝っているのか。彼らの不信仰なのか。その答えを探ってみることにする。

まず、ティシュリという言葉が好き理由については、正確な解答が難しいのである。ただ、あるラビによると、ティシュリのヘブル語「תְּשׁוּרִי」と創世記の1章1節に記されている「בְּרֵאשִׁית」と似ているからであると言う³。つまり、ヘブル語は通常右から読むが、ティシュリのヘブル語の左から読むと創世記の1章1節に似ているということである。聖書の表記では、このようなワードプレイが時々現われるのは事実である。というわけで、ティシュリという言葉は、創世記の始まりを示す言葉として理解されていると考えられる。そして、その第一の月は、出エジプト記の12章までに聖書の暦の基準となっていると考えるわけである。

さらに、ティシュリの月、すなわち第七の月が、どうして新年となるのかは、聖書箇所から伺えることが出来ると思うのである。ちなみに、荒野のイスラエルに主なる神は、レビ記23章の例祭に続き、25章に次のように命じられる。

25:9 その年の第七の月の十日の贖罪日に、雄羊の角笛を鳴り響かせる。あなたたちは国中に角笛を吹き鳴らして、25:10 この五十年目の年を聖別し、全住民に解放の宣言をする。それが、ヨベルの年である。あなたたちはおのおのその先祖伝来の所有地に帰り、家族のもとに帰る。〈レビ25:9~10(共)〉

これは、第七の月に新しい年が始まることを示していると理解出来る。そうしたら、主なる神の暦の新年がアビブの月からティシュリの月変わったのか。聖書には、そのような文句は見つからない。ただ、私たちが聖書の内容を通して理解を深める方法しかないと思うのである。ちなみに、アビブの月は、主なる神の大いなる御力によって、奴隷の家エジプトからの解放を祝う新年の始まりである。そして、イスラエルは、その方の御導きのよってシナイ山に上り、その方との契約と共にトーラーが授けられる。しかし、イスラエルの不信仰により、契約のシンボルである十戒の石版は打ち砕かれた。でも、モーセのとりなしにより、主なる神との契約は修復され、再び十戒の石版は授けられる。このような背景の流れを暦に合わせると、アビブの月からティシュリの月に至るのである。すなわち、ティシュリの月は、主なる神との関係回復の月とも言えるのである。

さらに、出エジプト記23章、レビ記の23章と25章、申命記11章の本文から伺えることは、イスラエルの例祭は、農業と深く関わっていることである。

23:14 あなたは年に三度、わたしのために祭りを行わねばならない。23:15 あなたは除酵祭を守らねばならない。七日の間、わたしが命じたように、あなたはアビブの月の定められた時に酵母を入れないパンを食べねばならない。あなたはその時エジプトを出たからである。何も持たずにわたしの前には出てはならない。23:16 あなたは、畑に蒔いて得た産物の初物を刈り入れる刈り入れの祭りをを行い、年の終わりには、畑の産物を取り入れる時に、取り入れの祭りを行わねばならない。23:17 年に三度、男子はすべて、主なる神の御前に出ねばならない。〈出23:14~17(共)〉

23:39 なお第七の月の十五日、あなたたちが農作物を収穫するときは、七日の間主の祭りを祝いなさい。初日にも八日目にも安息の日を守りなさい。〈レビ23:39(共)〉

11:10 あなたが入って行って得ようとしている土地は、あなたたちが出て来たエジプトの土地とは違う。そこでは種を蒔くと、野菜畑のように、自分の足で水をやる必要があった。11:11 あなたたちが渡って行って得ようとする土地は、山も谷もある土地で、天から降る雨で潤されている。11:12 それは、あなたの神、主が御心にかけ、あなたの神、主が年の初めから年の終わりまで、常に目を注いでおられる土地である。11:13 もしわたしが今日あなたたちに命じる戒めに、あなたたちが

ひたすら聞き従い、あなたたちの神、主を愛し、心を尽くし、魂を尽くして仕えるならば、11:14 わたしは、その季節季節に、あなたたちの土地に、秋の雨と春の雨を降らせる。あなたには穀物、新しいぶどう酒、オリーブ油の収穫がある。11:15 わたしはまた、あなたの家畜のために野に草を生えさせる。あなたは食べて満足する。
 <申11:10~15(共)>

イスラエルの農業の特徴は、春の大麦と小麦と秋の果実の収穫である。しかし、これらの農業のすべては天からの雨に頼っている。つまり、申命記11章は、約束の地はエジプトのように川から水を得るのではなく、ただ天からの雨に頼らなければならないというのである。ところで、この本文の12節の「年の初めから年の終わりまで」というのは春から秋のことではなく、14節に記されているように「秋の雨と春の雨」ということで、秋の雨は初めの雨となるのである⁴。つまり、12節の「年の初めから」というのは、春の例祭の時期からではなく、秋の例祭の時期からであると理解できるのである。ちなみに、イスラエルの雨季は、秋の例祭が終わってから降り始まるのである。

なぜ、聖書の暦はこのように複雑になっているのか。その理由は、春の新年は奴隷の家からの解放として、また、秋の新年は完全な贖いの完成を祝うという意味があると考えられる。ちなみに、古代のイスラエルの賢人たちは、秋の例祭が与える霊的意味として、主なる神が王としてイスラエルを治められると理解している。すなわち、メシアの渡来を期待するわけである。これは、まさにモーセが二度目の十戒の石版を持ってシナイ山から降りてきたときに比喻されるのである。さらに、このような歴史的出来事が比喻として示すことは、御言葉が肉となって来られたメシア⁵、また、その方によるヨベルの年の宣言という福音書⁶の証しは、秋の例祭こそメシアによる新しい年を示していると思うのである。ヨム・テルアと呼ばれるラッパを吹き鳴らす日は、ロシュ・ハシャナという新年として祝うことは、聖書に基づくメシアの時代を開く新しい年を意味すると理解出来るのである。というわけで、ユダヤ人は、約束のメシアが秋の例祭に来られると待ち望みつつ、新年を祝うと理解出来るのである。

約束の子

イスラエルでは伝統的にロシュ・ハシャナのパラシャとして選ばれている聖書箇所は、創世記21章である。創世記21章は、アブラハムに約束の子イサクが生まれるという喜ばしい内容と共に、ハガルとイシュマエルがアブラハムの家から追い出されるという悲しい内容が目立つところである。この聖書本文とロシュ・ハシャナとは、どのような関連性があるのか。古代イスラエルの賢人たちは、この内容をどのように理解し、ロシュ・ハシャナのパラシャにしているのか。

まず、創世記21章のなかで注目を引く出来事とは、不妊の女であり、年老いのサラに息子が生まれたことである。この内容が示すことは、主なる神の約束の成就である。また、アブラハムの子イサクは、メシアのシンボルとして描かれているのである。すなわち、メシアの約束を成し遂げるためのアブラハムとの契約の継承者となるのは、ハガルから儲けたイシュマエルではなく、サラの体から生まれるイサクであると約束されているのである。主イエスとイサクの出生の背景を比較すると、なんとなく共通点がある。それは、主なる神による奇跡的出来事である。ちなみに、サラの体は不妊であるので、子供を産み出すことは不可能である。また、マリアの体は処女であるので、彼女が子供を産み出すことも不可能である。両方にとって不可能であることが、主なる神の御業によって可能となったわけである。このようにイサクの出生はメシアの渡来に比喻される出来事である。

さらに、注目するところはサラ自身である。ちなみに、イサクの名前は「笑い」という意味がある⁷。もちろん、イサクの名前は創世記17章で与えられているが、創世記18章のサラの笑いにも関連している。

18:9 彼らはアブラハムに尋ねた。「あなたの妻のサラはどこにいますか。」「はい、天幕の中におります」とアブラハムが答えると、18:10 彼らの一人が言った。「わたしは来年の今ごろ、必ずここにまた来ますが、そのころには、あなたの妻のサラに男の子が生まれているでしょう。」サラは、すぐ後ろの天幕の入り口で聞いていた。18:11 アブラハムもサラも多くの日を重ねて老人になっており、しかもサラは月のものがとうになくなっていった。18:12 サラはひそかに笑った。自分は年を取り、もはや楽しみがあるはずもなし、主人も年老いているのに、と思ったのである。18:13 主はアブ

ラハムに言われた。「なぜサラは笑ったのか。なぜ年をとった自分に子供が生まれるはずがないと思ったのだ。18:14 主に不可能なことがあるか。来年の今ごろ、わたしはここに戻ってくる。そのころ、サラには必ず男の子が生まれている。」18:15 サラは恐ろしくなり、打ち消して言った。「わたしは笑いませんでした。」主は言われた。「いや、あなたは確かに笑った。」<創18:9~15(共)>

主なる神の子供の約束を直接聞いたのはアブラハムである。サラは、ただカーテンの後ろで、間接的にその約束を聞いていたのである。そして、彼女はそのような約束が現実になるわけがないと思っていたので、心のなかで笑っていたのである。

主なる神の約束が現実になるわけがない。つまり、この世の常識と神の約束は、あまりにも掛け離れているので、現実的に実現できるのは不可能であると思ってしまうのである。本当にそうなのか。誰でもそのように思ってしまうのであろう。本当に、メシアは来るのか。無差別テロによって多くの人々が犠牲になることも、主なる神の救いの計画のひとつであろうか。多くの人々が犠牲されるのに、救いの完成までいつまで待つべきなのか。

サラは、決して主なる神を信じなかったわけではない。しかし、彼女は一時的にその方の約束を疑ったのである。まさに、私たちの信仰もそうである。主なる神の御命令に従ってイサクを献げ物としてささげようとするアブラハムの敬虔な信仰より、ただカーテンの後ろで、主なる神の御声を聞きながら笑っているサラのように、時には疑いの心もある弱い人間に過ぎないのであろう⁸。しかし、いつかその約束が現実となったとき、私たちには笑いが止まらないであろう。その現実となるとときは、メシアの再臨のときである。

126:1主がシオンの捕われ人を連れ帰られると聞いて／わたしたちは夢を見ている人のようになった。126:2そのときには、わたしたちの口に笑いが／舌に喜びの歌が満ちるであろう。そのときには、国々も言うであろう／「主はこの人々に、大きな業を成し遂げられた」と。126:3主よ、わたしたちのために／大きな業を成し遂げてください。わたしたちは喜び祝うでしょう。126:4主よ、ネゲブに川の流れを導くかのように／わたしたちの捕われ人を連れ帰ってください。126:5涙と共に種を蒔く人は／喜びの歌と共に刈り入れる。126:6種の袋を背負い、泣きながら出て行った人は／束ねた穂を背負い／喜びの歌をうたいながら帰ってくる。<詩126:1~6(共)>

というわけで、古代イスラエルの賢人たちは、サラの人間的弱さを通して、もっと主なる神の約束を信じつつ、メシアの時代を迎えるように励ますために、創世記21章をロシュ・ハシャナのパラシャとして選んだのではないかと思われる。

ラッパを吹き鳴らす

ロシュ・ハシャナは聖書的に言うと、「ヨム・テルア(היום תרועה)」である。文字通り、ラッパを吹き鳴らす日という意味である。特にラッパというのは、角笛を指している。角笛は創世記22章に由来する。ちなみに、角笛はイサクの代わりに献げ物となった雄羊の角を思い出させると言う。ところで、なぜこの日に角笛を吹き鳴らすように命じられているのか。聖書的に角笛を吹き鳴らすこととは、何の意味を持つのか。聖書のなかでは、角笛を吹き鳴らす場面はいろんなところで記されている。そのうち、いくつかの聖書箇所を通して、角笛が持つ意味を調べることにしたいと思うのである。

聖書のなかで角笛は、いくつかの目的のために吹き鳴らされるのである。まず一つ目に、注意を引くために吹き鳴らされる。そして、角笛が最初に吹き鳴らされた出エジプト記の19章の内容を参照したい。

19:16 三日目の朝になると、雷鳴と稲妻と厚い雲が山に臨み、角笛の音が鋭く鳴り響いたので、宿営にいた民は皆、震えた。(共)

ここで角笛を吹き鳴らすことによって、イスラエルの人々に、これから何が起こることに気を配るように、もっと注意を払いように呼びかけるのである。また、角笛を吹き鳴らすことで、王が話されようとする、すなわちイスラエルにトーラーを授けようとする、と宣言するのである⁹。

二つ目には、警告を知らせるために、角笛を吹き鳴らすのである。

角笛の音を聞いた者が、聞いていながら警告を受け入れず、剣が彼に臨んで彼を殺したなら、血の責任は彼自身にある。〈エゼ33:4(共)〉

町で角笛が吹き鳴らされたなら／人々はおののかないだろうか。町に災いが起こったなら／それは主がなされたことではないか。〈アモス3:6(共)〉

預言者たちの預言によると、主なる神からの警告を知らせるために、角笛を吹き鳴らすのである。つまり、主なる神の御言葉の宣言こそ、角笛を吹き鳴らすことであると理解出来るのである。

三つ目には、最後の裁きを知らせるためである。

1:14 主の大いなる日は近づいている。極めて速やかに近づいている。聞け、主の日にあがる声を。その日には、勇士も苦しみの叫びをあげる。1:15 その日は憤りの日／苦しみと悩みの日、荒廃と滅亡の日／闇と暗黒の日、雲と濃霧の日である。1:16 城壁に囲まれた町、城壁の角の高い塔に向かい／角笛が鳴り、関の音があがる日である。〈ゼパ1:14~16(共)〉

4:16 すなわち、合図の号令がかかり、大天使の声が聞こえて、神のラツパが鳴り響くと、主御自身が天から降って来られます。すると、キリストに結ばれて死んだ人たちが、まず最初に復活し、4:17 それから、わたしたち生き残っている者が、空中で主と出会うために、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます。このようにして、わたしたちはいつまでも主と共にいることとなります。4:18 ですから、今述べた言葉によって励まし合いなさい。〈1テサ4:16~18(共)〉

以上の聖書箇所は、最後の日の主なる神の裁きのときを知らせるために、角笛を吹き鳴らすと示している。これは主なる神がその方の民の敵を滅ぼし、その方の民を救い出すという希望的メッセージである。しかしながら、この希望的メッセージのなかには、その方のトーラーに基づくトーラーライフにという信仰のあり方が問われるのである。

結び

聖書の歴史と世界の歴史を照らし合わせると、明らかに角笛の音は聞こえてくるように見える。つまり、聖書の様々な預言が、成就されつつあるなかで、角笛の音をますます大きくなりつつあると思うのである。それは、メシアの再臨が近づいていることを意味するのである。しかしながら、今日に生きる人々、否、主にある人々は、どれほど角笛の音に耳を傾けているのか。本当にその音が聞こえるのか。

まさに角笛の音は、主なる神の警告のメッセージである。すなわち、その方の預言の御言葉である。その預言とは、メシアの再臨が近づいていることである。今私たちはそのメッセージに耳を傾けながら、その方を迎える準備をしているのか。今私たちは主なる神の御教えであるトーラーに基づく正しい生き方を行っているのか。また、この世に向かってその方が再臨されると、どれほど真剣に伝えているのか。今年のメシアの新年を迎えながら、もう一度、私たちの信仰のあり方を点検したいと思うのである。